

山根一仁さん応援レポート

フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団 第59回演奏会
2015年9月19日(土)
東京芸術劇場

シベリウス生誕150年を記念して



開館25周年を迎える東京芸術劇場。
フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団
第59回演奏会は、作曲家シベリウスの生誕150
年を祝い、シベリウス一色のプログラムで飾
られる。

指揮は矢崎彦太郎氏。山根さんは、ヴァイオ
リン・ソリストとして出演。

フィンランドが生んだ大作曲家シベリウスは、
ももとはヴァイオリニストを目指していたとい
われる。そのシベリウスが残した唯一のヴァ
イオリン協奏曲が本日の曲目だ。

コンサート・パンフレットには、『…現在その
活躍が天才的とも言われ、最も注目されてい
る若手ヴァイオリニスト山根一仁…』との紹
介文。大作をどう弾きこなすか、楽しみは尽き
ない。



澄んだ高音の響き。繊細な旋律も自在に



3階席までほぼ満員の客席。
正面にそびえるパイプオルガンが見事である。

最初の曲、シベリウスの交響曲第7番。コントラバス8台が並ぶ舞台、客席は、シベリウスの故郷であるフィンランドの空気に包まれる。

大きな拍手に迎えられ山根さん登場。ヴァイオリン協奏曲のソリストとして、矢崎彦太郎氏の指揮との息もぴったり、伸びやかに華やかに難曲を弾きあげていく。

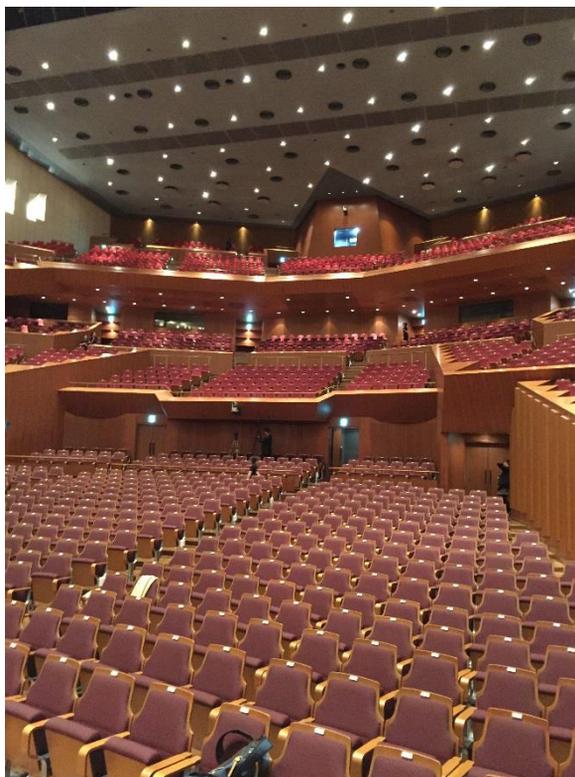
第1楽章、ピアノシモで静かに始まり、繊細な旋律が続く。ヴァイオリンカデンツァ(独奏)、抒情的に研ぎ澄まされた音色が響く。澄んだ高音が美しい。

第2楽章、ゆったりとした曲調のもと、繊細な音色が朗々と響く。

第3楽章、強く華やかな曲調。いわゆる「超絶技巧」の独奏ヴァイオリン。圧巻。



「ブラボー！」と拍手の嵐の中、指揮者矢崎氏、コンサートマスターと熱い握手。大作を華麗に弾き終えたソリストに楽団員の方々も、惜しめない拍手を送ってくださった。



「練習は大変だったけど本番が一番楽しめました！」



終演後の山根さんに話を聞くことができた。

「…楽しかったです。オケの方々がとても温かくて、気持ちよく演奏することができました。」

「…指揮の矢崎先生が気持ちよく弾かせてくださいました。本番でアドリブしてもOK、本番でかわることもあるさ、音楽ってそうあるべきだよな。…演奏会を重ねる中で、何が大切かを考えようよ、毎回変わって楽しむことだよ、と」

オーケストラとの大きな公演が続きましたねとの問いには、
「幸いです。ソリストとして演奏させていただいて。ありがたいし、恵まれているし、本当に幸せだなと思っています」

「…こちらが、いろいろなアプローチを仕掛けると、オーケストラの方々も、いろいろな反応をしてくださるんです。それを楽しませていただきました」との答え。



オーケストラとの共演は、毎回ステップアップの経験になっているとのこと。頼もしいかぎり。

演奏会が続いたが、毎回曲調の異なる大作が選曲されていた。短期間に、さぞかし練習は大変だったろうとたずねると、

「大変です。練習は大変でした。でも、本番が一番うまくいくんです。楽しめば、うまくいきます」と、これもまた頼もしい返答。

自身に試練を課すかのように、新たな曲へとチャレンジする姿勢がまぶしくもあった。

本日も演奏衣装の写真を撮りそびれてしまったが、レアかもしれない(汗)くつろいだ表情をパチリ。

山根さん、素敵な演奏でした。
また聴かせてください！

<本日の演奏曲目>

シベリウス/交響曲第7番 ハ長調
シベリウス/ヴァイオリン協奏曲 ニ短調
シベリウス/交響曲第1番 ホ短調

<出演>

指揮: 矢崎彦太郎
ヴァイオリン: 山根一仁
コンサートマスター: 永峰高志
管弦楽: フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団



【コンサート・パンフレット】

PHILHARMONIC
ENSEMBLE
ORCHESTRA

59TH
CONCERT

Sat. Sep. 19 6:00 p.m. 2015
Tokyo Metropolitan Theatre

Program

シベリウス / Sibelius
交響曲第7番 ハ長調 (22分)
Symphony No.7 in C major

シベリウス / Sibelius
ヴァイオリン協奏曲 二短調 (32分)
Violin Concerto in D minor

--- intermission ---
休憩(20分)

シベリウス / Sibelius
交響曲第1番 ホ短調 (39分)
Symphony No.1 in E minor

指揮
矢崎 彦太郎
Hikotaro Yazaki / Conductor

ヴァイオリン
山根 一仁
Kazuhiro Yamane / Violin

コンサートマスター
永峰 高志
Takashi Nagamine / Concert Master

管弦楽
フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団
Philharmonic Ensemble Orchestra

後援:フィンランド大使館



2014年10月18日 第57回演奏会 すみだトリフォニーホールにて

《ごあいさつ》

本日はフィルハーモニックアンサンブル管弦楽団(PEO)の第59回演奏会にお越しいただき、誠にありがとうございます。

今回はフィンランドを代表する作曲家、シベリウスの生涯150年に当たる年に因みまして、オールシベリウスプログラムと致しました。

同一作曲家という当団としては珍しいプログラムでございますが、今宵はフィンランドの雰囲気浸っていただければと思います。

指揮にはパリ在住で我々PEOの演奏会に度々ご指導を賜っている矢崎彦太郎氏を迎え、ソリストには現在その活躍が天才的とも言われ最も注目されている若手ヴァイオリニスト山根一仁氏を迎えました。ヴァイオリニストでもあったシベリウスの思いの詰まった、そしてヴァイオリン協奏曲としても名曲中の名曲であるコンチェルトを演奏させていただきます。

2曲の交響曲はシベリウス番号付き交響曲の最初と最後の作品ですので、その違いに興味をそそられましたが、想像以上に難曲であり、精進して練習を重ねて参りました。

共通の雰囲気はありながら、それぞれ特色のある3曲でございますので、お楽しみ戴ければ存じます。

今回も、2011年3月の震災の影響で、故郷を離れて東京周辺にお住まいの方々と共に、母国を離れて海外から留学されている方々をご招待させていただきます。

最後に、ご指導くださった指揮者の皆様、自主運営の社会人オーケストラであるPEOを支えて下さるお客様に感謝申し上げますと共に、今宵ひと時の音楽を共有して戴けることを幸せに存じます。

どうぞ最後まで、ゆっくりお過ごしください。

フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団
幹事長 小林政博

指揮

CONDUCTOR

矢崎 彦太郎

Hikotaro Yazaki



1947年東京生まれ。4才よりピアノを始め、上智大学数学科で学んだ後、同大学から東京芸術大学指揮科へ再入学。金子登、渡邊峻雄、山田一雄各氏に指揮法を学んだ。

1970年より2年間日本フィル指揮研究員として小澤征爾の助手を務め、あわせて秋山和慶氏にも教えを受ける。

1972年東京ユース・シンフォニー・オーケストラのスイス演奏旅行に指揮者として同行、以降ウィーン、ローザンヌ、ロンドン、パリと移り住み、その間スワロフスキー、コシュワー、フェアラウ、チェリビタック、デルヴォーに師事。

1975年ブザンソン国際指揮者コンクールなどに入賞を果たし、同年、ボーンマス交響楽団定期演奏会を皮切りに本格的に指揮活動を開始。これまでに、ロイヤル・フィル、BBC響、バーミンガム市響、リヨン響、ノルウェー放送響、トゥールーズ室内管、スイス・ロマン管、フランス国立放送フィルなどを指揮している。1979年よりパリに拠点を移す一方、同年には東京交響楽団定期演奏会を指揮し日本でもデビューを果たした。また、ダニエル・ルシュール作曲「オンディエヌ」の世界初演でオペラにも活動の場を広げて以来、ゴルドー歌劇場、二期会、関西二期会にも招かれている。

これまでに、東京交響楽団指揮者、ノルウェー国立放送管弦楽団(オスロ)首席客演指揮者、旧西ドイツのホフ交響楽団の音楽監督・首席指揮者、フランス国立トゥールーズ室内管弦楽団首席客演指揮者、東京シティアールハーモニック管弦楽団首席客演指揮者などを歴任。

また、2000年よりバンコク交響楽団名誉指揮者、2004年から2009年まで同楽団音楽監督・首席指揮者を歴任。2005年よりジャカルタのヌサンタラ交響楽団音楽監督、2009年よりバンコクのガラヤニ・ワタナ・オーケストラ指揮者を兼任。

長年わたる日仏音楽交流への貢献に対し、2000年フランス政府より芸術文化勲章シュヴァリエを、2008年には同オフィシエ勲章を受勲。2002年エクソンモービル音楽賞奨励賞を受賞。パリ在住。

【コンサート・パンフレット】

ヴァイオリン

VIOLIN

山根 一仁

Kazuhito Yamane



Photo: Hiro Sato

1995年生まれ。

2010年、中学校3年在学中に第79回日本音楽コンクール第1位、レウカディア賞、黒柳賞、鷺見賞、岩谷賞(聴衆賞)、並びに全部門を通して最も印象的な演奏・作品に贈られる増沢賞も受賞。同コンクールで中学生の1位は26年ぶり。

以後、秋山和慶、井上道義、梅田俊明、大友直人、高岡健、広上淳一、山田和樹等各氏とNHK交響楽団、東京都交響楽団、東京交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団をはじめ国内のオーケストラと共演を重ねる。ベルリン・フィル五重奏団、マキシム・ヴェンゲロフ氏との共演、トッパンホール『エスボワールシリーズNo.11』に最年少で抜擢される等、注目を集めている。

テレビ・ラジオへの出演もNHK-Eテレ『さらさ♪クラシック』、テレビ朝日『題名のない音楽会』等多数。

第60回横浜文化賞文化芸術奨励賞を最年少受賞。

12年岩谷時子音楽財団第2回Foundation for youth賞受賞。

12年13年度ロームミュージックファンデーション奨学生。

第43回江副記念財団奨学生。

これまでに故宮圓真、水野佐知香両氏、制理学院大学リストディプロマコースにて原田幸一郎氏に師事。

2015年秋よりミュンヘン音楽大学にてクルストフ・ポッペン氏のもと、さらに研鑽を積む。

副指揮者

ASSISTANT CONDUCTORS

前田 淳、佐々木新平、鈴木惠里奈

(アルファベット順)

フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団

PEO

1976年、立教大学交響楽団OBにより、合唱団の依頼に応えるかたちで「メサイア」(ヘンデル) 祝祭オーケストラとして結成。1979年に初の催演演奏会を開くにあたり、広く門戸をひろげ、一般の社会人オーケストラとして東京を中心に自主運営活動を続けていく。

「ホールも楽器の一部」との基本理念から演奏会場も音響の良いホールを求め、本拠地東京のみならず、国内外の名ホールを巡る演奏旅行なども企画し、他地域との交流にも心がけている。また、第一線の演奏家を指導者に迎えるのみならず、トップアーティストをリストやゲストとして迎えるなど、常に音楽的発展を享受しオーケストラのレベル向上をはかっている。

1992年USコンサートツアーでは、フガデルフィア他ニューヨークのカーネギーホールで公演。故安田南雄氏の「日本の古典」を題材にした作品を海外に紹介し、日本を代表するジャズピアニスト山下洋輔氏共演の「ラフノディ・イン・ブルー」と共に喝采をあげた。

1998年、ウーレン楽友協会大ホールにて日本をモチーフにした曲などを紹介する。2000年、北京 世紀劇院大ホールにて、共演のマリンバ奏者 安倍圭子作品の自作自演などを指揮の友友直人氏とともに紹介。2002年5月にはベルリンのフィルハーモニーホールにて、三枝成彰作曲の「カンタータ『天誅』(ボーイソプラノ・ソロ/ヨナタン・リヒター)を大友直人指揮で海外初演し、モルゲンボスト紙などでも好評を博す。

国内公演では、メゾソプラノのエレナ・オブラストヴァ、徳永義一郎・徳永二男兄弟(ブラスム/二重奏楽曲)、ピアノの山下洋輔、花房晴美、トランペットのコンラディン・グロート(元ベルリンフィル首席)、ヴァイオリンの大谷康子、千住真理子、ギターの萩村清志などの諸氏と共演している。

2004年3月、レオンカヴァッリ作曲のオペラ「ラ・ボネーム」をトヨタコミュニティコンサートの一環として日本初演、音楽関係誌で絶賛される。

2007年7月に小林研一郎指揮で第3回ヨーロッパ演奏旅行を実施。ハンガリー/ブダペストにてベートーヴェン第九、オーストラリア/ウーレンにてマーラー「復活」(交響曲第2番)を演奏し好評を博す。

2009年7月、オランダ/アムステルダム コンセルト・ボウ サマーコンサートに招聘され、小林研一郎指揮(独唱: Martina Prins, Helena Rusker)でマーラー「復活」(交響曲第2番)を演奏。演路の聴衆からスタンディング・オベーションを受ける。

2010年11月、三枝成彰団長の六木本男声合唱団倶楽部に同行し、イタリア/ミラノ大聖堂にて、三枝成彰作曲「レクイエム」を演奏。

2012年、7月チェコ/バゾルザークホールにて、小林研一郎指揮のもと、チャイコフスキー/交響曲第5番等を演奏し、スタンディング・オベーション等の大喝采を浴びる。

演奏会のライヴCDとして、マーラー「復活」(交響曲第2番)、同/交響曲第3番、「エレナ・オブラストワとともに」、R.シュトラウス「英雄の生涯」(Vn.大谷康子)、ショスタコービッチ/交響曲第5番「革命」、リムスキー・コルサコフ「シエラザード」(Vn.大谷康子)をリリース。

1998年には当時ベルリンフィルのフロートランペット奏者であったK.グロート教授と共に、トランペットの名曲を満載したオリジナルCD「トランペット協奏曲」、2004年、ベルリンフィルのフロートランペーン奏者オラフ・オットとのCD「トランペーン協奏曲集」をカタリタ・トウキョウより、

2012年、ドヴォルザークホールにてのライヴCDをオクタヴィアレコードからリリース。

〈今後の予定〉

■第60回演奏会 ~40周年~ 2016年3月19日(土) すみだトリフォニーホール
指揮:小林研一郎 独奏:仲道郁代
ベートーヴェン/ピアノ協奏曲第5番「皇帝」、ショスタコービッチ/交響曲第5番「革命」

■第61回演奏会 ~40周年~ 2016年10月29日(土) すみだトリフォニーホール
指揮:矢野勝彦

コンサートマスター

CONCERT MASTER

永峰 高志

Takashi Nagamine

1980年東京藝術大学卒業、NHK交響楽団に入団。第1ヴァイオリン首席奏者、第2ヴァイオリン首席奏者として活躍する。2012年NHK交響楽団より同団への功績が認められ第32回有馬賞を授けられる。2015年同団を退団する。

現在、オーケストラとの共演やリサイタル等ソロとして、またウルフガング・サヴァリッシュ、ペーター・シュミードル、ヴェンツェル・フックス各氏との共演等室内楽奏者として活躍している。
ゲストコンサートマスターとして、これまでに新日本フィル、シティアフィル、仙台フィル、山形交響楽団、新見日本交響楽団(現東京フィル)などのオーケストラに出演している。また、仙台フィルハーモニー管弦楽団を指揮し好評を得ると、最近では指揮者としても活動の場を広げている。

国立音楽大学教授、洗足学園音楽大学客員教授、東京藝術大学非常勤講師として後進の指導にも当たる。その指導はヴァイオリン奏法だけでなく、オーケストラスタディ、オーケストラ奏法にまで及び、門下からはNHK交響楽団、新日本フィルハーモニー管弦楽団をはじめ国内外のオーケストラのオーディションに数多くの合格者を輩出している。

2010年より岩手県久慈市文化会館(アムバーホール)の芸術監督を務め、数々の公演をプロデュースし成功を収めている。

ヴァイオリンに加藤清美、鷺見健彰、福元裕、田中千香土、ジャン・ローランの各氏に師事。室内楽を森本真理実奏楽四重奏団、伊達純、ルイグ・レラーの各氏に師事。

指導者

村上 和邦 (元NHK交響楽団 Vn.)	菅原 潤 (NHK交響楽団 Fl.)
永峰 高志 (元NHK交響楽団 Vn.)	森田 裕 (NHK交響楽団 Fg.)
望月 七海子 (元東京都交響楽団 Va.)	山本 真 (元NHK交響楽団 Hr.)
丹羽 経彦 (元NHK交響楽団 Vc.)	デヴィッド・ベルツォーク (新日本フィルハーモニー首席 TP.)
貝原 正三 (新日本フィルハーモニー Vc.)	新田 幹男 (NHK交響楽団 Tb.)
鈴木 雄介 (Vc.)	オラフ・オット (ベルリンフィルハーモニー Tb.)
井戸田善之 (NHK交響楽団 Cb.)	久保 昌一 (NHK交響楽団 首席Timp.&Perc.)
甲斐 雅之 (NHK交響楽団 Fl.)	前田 淳 (武蔵野音楽大学 准教授)

※完全版はホームページに掲載中

今回の演奏会では、望月七海子氏にヴィオラトランプ、鈴木雄介氏にチェロトランプをお願いしております。



副指揮者

ASSISTANT CONDUCTORS

前田 淳、佐々木新平、鈴木惠里奈

(アルファベット順)

フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団

PEO

曲目紹介

LISTENER'S GUIDES

作曲家紹介



シベリウス・ヤン

Jean Christian Julius Sibelius
(1865-1957)

フィンランドの南内陸部の小都市ハメーンlinnaに生まれる。父は軍医だったが、2歳8月のときに急死、生活に困った母、弟と共に母の祖母宅へ身をよせて育つ。
5歳からピアノ、11歳頃から作曲を始める。14歳で習い始めたヴァイオリンに夢中になり、ヴァイオリニストを志して研鑽を積み、しかし、長男として父を継いで医者になることを期待され、やむなくヘルシンキ大学医学部に進学する。

医学に興味ももたず、20歳で法学部に移したが、「法科の勉強を続ける」約束で家族を説得、ヘルシンキ音楽院選科に入学。作曲家のヴェグマリウス、ピアノのゾノーニといった教員陣によってヴァイオリンと作曲の才能が認められて将来を有望とされ、法学部を中退、本格的な音楽家業に入る。

1889年に音楽院を卒業。翌年、国費奨学金でベルリン留学、ついでフランスに留学。作曲に際して、ベッケン(独)・ゴルトマルク(独)、フックス(独)らに師事。この頃、フィンランドの民族団結を受け、1895年「種族の上がり症」により不適合となり、ヴァイオリニストになる夢を断念したという誤謬がある。

1891年に帰国後、生活のためにヘルシンキ音楽院、オーケストラ学校で教鞭をとりつづ、作曲に専念。翌92年、26歳でデビュー作となる「フルヴォ交響曲」を発表し、大成功。これは叙事詩集「カレワラ」(1895年初版)に登場する英雄の英雄クレルヴォを描いた、壮大な交響詩であった。この曲のように、フィンランドの文化や歴史を色濃く反映した作風は、シベリウス作品の特徴であり、高い評価と人気を呼んだ。

フィンランドは12世紀から9世紀初頭まで約700年間スウェーデンに支配され、ひき続き帝政ロシアの属国となった。だからこそ、カレリア地方で伝承されてきた時謡を集大成したカレワラは、長年抑圧されてきたフィンランド人のアイデンティティを象徴する「魂のよどこ」とされる。シベリウスの生きた時代、フィンランドは第一次世界大戦、ロシア革命、第二次世界大戦の動乱に巻き込まれ、独立できな代わり多くの犠牲を払って辛酸をなめた。そんな時代背景もあり、愛国劇「歴史の再演」の劇伴楽曲「交響詩『フィンランド』が熱狂的に支持される。これが決定打となって、シベリウスは「民族的新ロマンチズム」の旗手である「国民的作曲家」と慕われ、国内外に名声をどろろさせた。

私生活では一流好みゆめに浪費家で、アルコール依存傾向があり、家計はいつも赤字だったという人間側面も一面もある。音楽家としての功績に加えて、大変なお洒落で人当たりの良い人柄が愛され、晩年はフィンランドの国際文化大使のような役割を担った。ただ、スウェーデン語を話す家庭環境で生まれ育ったため、フィンランド語話には生活苦境はした。26歳で親友の妹と結婚、子供は6人とも娘(三女は夭折)。

1929年以降は、なぜか新曲発表がなく、92歳の死去まで28年も空白期間がある。指揮者クレーヴェツキエの妻でボストン交響楽団の初演者だった交響曲第8番は、結局幻に終わった。一説によると、年々自己批判が強まって自作に満足できず、ほぼ完成していた第8番をもとに作曲の楽譜を、自宅の暖炉で燃やしてしまったという。没後ヘルシンキ大聖堂にて埋葬。ユーロ導入前までフィンランドの100マルカ紙幣の「顔」だった。

